

蛸屋八兵衛・隠岐郡知夫村薄毛

令和2年9月2日掲載

収録・解説・酒井 董美^{たむら} イラスト・福本 隆男



https://kanbensato.com/minwa/kancho_20200802.html

語り手 前横ヨキさん（明治26年生まれ）
収録・昭和51年7月30日

あらすじ

昔、薄毛に蛸屋八兵衛という貧乏な独り者がいた。蛸を捕って金が貯まったので、金の茶釜を買って大阪の天王寺に詣って奉納したら、とても評判になつてある長者が「うちに泊まるように」と連れて帰り、八兵衛を風呂に入れて、シラミだらけの着物を丹前に取り替えさせ、「本物の金持ちはこのようにやつしているものだから、決して粗末な扱いをしないで」と家の者にも言い含め、山海の珍味を出して八兵衛を接待し、「嫁はあるか」と聞いたが、「いや、嫁はない」と答えると、「うちの七人の娘の中から選べ」というので、八兵衛が真ん中の娘を選んだら、「来年正月十五日に連れて行く」ということになった。わが家へ帰った八兵衛は近所の新築の家に頼み、婚礼の間借りることになり、表札もかけた。長者一行がやって来て婚

礼を済ますと帰っていった。八兵衛は自分のあばら屋に嫁を連れて帰ったが、「来た以上は辛抱します」と嫁も帰らなかった。夜中の十二時ごろになると、カアングオンと不思議な音が床下からするのが怖くて、八兵衛は「蛸漁に行く」と毎晩家を空けるが、嫁は肝が太く、音が聞こえると「精のある者か、ない者か」と言うのと「ある者だ。わしは金神だ。ここを掘って出してくれ」と言う。翌朝、八兵衛が家の軒下を掘ると金のいっぱいまった壺が出てきた。それで本物の長者になつて二人は幸せに暮らした。

解説

知夫村は隠岐地方の島前地区にある漁村であり、漁村にふさわしいこのような昔話が残されていた。関敬吾『日本昔話大成』で調べると、本格昔話の「婚姻・難題」の中に「蛸長者」としてこの話型が、次のように登録されていた。
1、貧乏な漁夫が金持ち

をよそおつて長者の娘を息子の嫁に約束する。2、家が小さいために(a)人の住まない家を借り、または(b)殿様に古い家を借りて嫁を迎える。3、三つの化け物が出る。親と息子は恐れて逃げる。4、嫁が恐れなかつたために、それぞれ室の化け物であるのを知り、それを掘り出して金持ちになる。

このように話型にそっくりの話であることが分かる。ところで昔話には語りはじめの言葉（話頭句）が決まっているが、出雲地方や隠岐地方では「とんとんと昔があったげな」が普通である。また、終わりの言葉（結句）は出雲地方や伯耆地方では「こつぽし」「こつぽり」が多い。松江市だけはこれ以外に「昔まつこう」が聞かれることもある。ところが隠岐地方では「すつとんからん」「とん」「とんよ」などであるが、ここ知夫村ではなぜか「その昔のぐんべのはあ」で終わるのが定番になっているのである。（元島根大学文学部教授）